

## 〔Ⅳ〕 講演

### 「国際理解と日本語」

国立国語研究所所長

水谷 修

国際理解と日本語という題が何かおかしいのではないかと感じた方もいらっしゃると思います。私自身もちょっと躊躇したのですが、まあこれでいってみようかと……。その趣旨と申しますのは、例えば私達は国際理解というテーマを考えますと、じゃあまず外国語、相手の言葉を覚えなければ、とこういくんだろうと思うのですが、どうやら世の中はそういう状態だけでは進んでいない。相手の言葉について我々がどう考えるか、これは勿論大切なことです。それが白人の顔を見れば英語で話しかけるというような姿勢だけを持っていた時代、今でも多少残っていると思うのですが、あのフランス人やドイツ人が英語で話しかけられて不愉快だと、こういうふうに行くことも結構まだ多い訳です。英語が万能なのではなくって、それぞれの国に言葉がある。中国人には中国語が、韓国人には韓国の言葉があると、その相手の国の言葉について私達が学ばべきであろう。それについて何かの技術を持つべきであろう、ということは明らかに必要なことです。ただしそれが、その英語なら英語を学べばアメリカ人とちゃんとコミュニケーションが出来るかということ、これは限り無く難しい課題があって摩擦を起こさないような英語の使い方が出来る人というのは日本の中でも何人もいないのではないかと、それほど外国語というのは難しい面を持っている、いや少なくとも使う立場としては謙虚でなければならないと思うのです。頭の中で習った英語、文章を読んで覚えた英語、それは実際の人と人とのコミュニケーションの場では生きた言葉として使えないということが良く分かります。皆様の中にも御経験をお持ちかも知れませんが、私なんぞも良く今だにやるんですが、相手から英語で聞かれて「アー・ユー・カミング・トゥモロー」と聞かれる、そしてそういう場合隣の人がそう聞かれると、で隣の人が「ノー」と答える、まあ、行かないと答える。次に今度こっちに向かってその人が「アンチュー・カミング・トゥモロー」その否定の形で聞いてくる、そうするとつい自分としては「イエス」と言ってしまう、「明日こない?」「はい行きません。」とこう答えたくない。それが影響して「イエス」が出てしまう、ということは良くあると思うのです。それは日本語を使って生活している限りは、切替えてというのがそんなに

簡単なことではない。でも「イエス」とだけ答えたらその伝えるべき内容っていうのは、まるで反対になってしまう訳ですから困る訳です。そんなことっていうのは一杯あると思うのです。例えば初対面の場所でアメリカ人と話をしておきますと、私達は挨拶の言葉を「ハウ・ドゥ・ユー・ドゥー」と何かやった後で、話題を切り出して行く時に「ホエア・ドゥ・ユー・カム・フロム」「何処から来たのか。」とかそんなことを聞いていく、そのついでの中に「ハウ・オールド・アー・ユー」「幾つですか。」というのを気楽に聞いちゃう、これは日本語の中でもタブーではあると思うのですが、もしかすると英語教育の成果かも知れませんが、テキスト等について使われているのをそのまま使ってしまうって言うようなことででもどこかで許されるものが日本語である。その習慣を英語で使う時にも持ち込んでしまうことがコミュニケーションの上での摩擦を起こすということがある訳です。その場合は私達が英語を使う時に、例えば中国語でもどの言葉でも同じですが、使う時に日本語の習慣で話をしているということだと思うのです。だからその日本語の習慣についての反省力を持っていないと、あるいは英語の習慣との差について意識がなければ、ベラベラ喋るけれどもどんどん誤解を与える可能性があると思うのです。その意味でか日本語と関わりがやっぱりあるんだ、外国語を使う場合にもそれを無視してはいけないんだということ、その点で国際理解とは日本語ということを考えられるんじゃないか。

それから日本語そのものに関してですが、最近では世界中で随分日本語を使っている人が増えてきました。学習者の数も年々60%位増えるというようなこともあったりします。海外で100万人学習者がいるともあるいは今では400万人いるともいろんな数字が出されていますが、はっきりした数はつかめないでいます。でもそのトイフルと似たような試験で日本語能力試験というのが世界の40ヶ国位で今行われておりますけれど、これの受験者の増加率を見ると、2年で倍になるという割合で増えてきています。そういう状況などから考えると物凄い勢いで日本語を使う外国人が増えてきているのであろう。ですから我々が外国の人とコミュニケーションをする時は、選ぶべきチャンネルは

2つありまして、1つはその相手の国の言葉を使うということ、もう1つは日本語を使って外国人と話をするという可能性が大きくなってきている。どちらがよいとか悪いとかっていうこと以前に現実にそれは始まっているということであって、外国語が使えるかどうかということと同時に、日本語で外国人とコミュニケーションが出来るかどうか、この方が遭遇する機会は多いのではないかと思うのです。こんなことがありまして、もう4年も前になりますでしょうか、電気工学ですか、その専門家の方達、学会という名前だったと思うのですが、その学会の方達と、それから化け学の協会の方達から2度にわたって、これも続いてでしたが講演の依頼を受けました。でその日本語について話をして頂きたいという依頼があったんですね。それ以前にはそんなことは全くなかったものですから、一体何を私は電気だとか化け学の専門家の方達の前でお話したらいいのかっていう質問をした訳です。そうしましたら、その学会、協会の方のお話になるのには、実は我々は今まで多数の外国人の留学生や研修生を受入れてきた、でその研修生や留学生に対してはいろいろな指導を行った。その指導に使う言葉は英語であった。英語を使って彼らを指導することについては十分な自信をもっている。ノウハウをちゃんと用意している。ところが最近変化が起こってきて、その外国人の留学生や研修生の中に英語が出来ないのが増えてきた。確かに、御存知のように例えば中国等の場合には英語教育が余り行われなかった時代等もありましたので、出来ない人が沢山留学生でも来ている訳ですね。南米から来ている留学生なんかでも英語に弱い人も結構増えてきています。数が増えれば語学に弱い人も当然増えて来る訳で、この電気の学会あるいは化け学の協会の方達の仰ることも良く分かりました。実はこういったことで英語の出来ない研修生、留学生が増えてきた、それで英語が通じないから困った。ところがその研修生や留学生を見ていると、お互い同志違った国のその学生達が日本語を通してコミュニケーションをしていることが分かった。決して上手な日本語ではないけれども日本語を使って話し合いをしている。そこで私達教師の方では、それじゃ日本語で指導してみようということを決めた。実際にそれを始めてみたら非常に困った。私達の使う日本語が彼らに通じない。私達の日本語は普通の正常な日本語だと思っただけけれど、研修生や留学生には通じない。研修生や留学生同志が使っている日本語は、まあ上手ではないけれどもちゃんと通じ合ってるのになぜ私達の使う日本語が通じないんですかと、その外国人に通じる日本語の使い方を教えて下さい、とこういう注文でした。

このお話が象徴的に示しているかと思うのですが、

身の回り日本の社会の中にどんどん外国人が入って来る、ただ留学生としてではなくて、これからは違った形でもっと増えて来ると思うのです。その人達はやはり何らかの形で日本語を使う可能性は高い訳です。その時にその外国人が使っている日本語が正確に、あるいはその意図が我々によって受け止められ得るであろうかどうか、誤解をしないかどうかという大きな問題、課題があると思うのです。良く言われることですが、あの中国人は、あのアメリカ人は尊大であるということを使うことがあります。でも良く見ていると実はそれは本人は非常にいい気持ちで話をしているにもかかわらず、善意をもって話しているにもかかわらず、日本語の表現の仕方が上手く出来ていない、日本人の持っているルールに違反している為に不遜だとか、威張っている、自己中心的だ、という評価が下されることが結構多い訳です。そこが大きな問題点で、日本語を使っているから通じるだろうという保証は実はない。文法的な問題でも勿論ありますけれど、それ以上に言葉の使い方の適切さというものが、折角日本語を使って話をしようとしている外国人と、受け止めようとしている日本人の間に大きな壁を作ることになる。日本語だから自分の立場で自分のやり方で彼らもやるべきだということは、これは一つの、彼ら外国人にとっても目標になり得るでしょうけれども、決して外国語というのは簡単に身につくものではない。学習している初級の段階でもコミュニケーションをしなければならぬ。「ノー」と「イエス」がきちんと使い分けられなくても、我々が英語を使うように彼らもある段階で日本語を使う、その時に、その使っている日本語が我々を怒らせた時に、その原因は何処にあるかということが察知出来ないと相手の意図を理解することは不可能になる訳ですね。だからその意味で、その国際理解と日本語の問題を今日のテーマにしようと思った訳です。

具体的な例を幾つか上げながら、例えば外国人がこういった場合にその意としていることは何であろうか、こちらが腹が立つとすればそれは何故か、というようなことを御一緒に考えて参りたいと思います。例えばこれは実際にあった例ですが、これはアメリカ人の学生でしたが、話をしている途中で「ヤマダサンノオバアサンハ、フルイニナリマシタ」ということを言ったこと、これ決して上手な段階ではないんですが、この文を聞いた時に我々はどう受け止めるか。「ヤマダサンノオバアサンハ、フルイニナリマシタ」と「フルイニナリマシタ」というのは、多分これは文法を間違えただろう。要するに「古くなった」と言いたかったのだろう。ここは文法の問題ですからまあまあはつきりしている。しかし文全体の意味は一体何なんだろう

うか。何が言いたかったのだろうか。「山田さんのおばあさんが古くなった。」「それは変よ」という出方をする。これは素直な反応ですが、その彼が言おうとしていたのは、歳をとったということが言いたかった訳ですね。で、考えてみますと我々が人間の年齢に関して話をする時には、古いというのは使わない訳です。そのある住所に長く住み着いていると、こういう時は古いつていうのはこれは言えるんですけど、歳をとって古くなったっていうのはこれはちょっと喧嘩を引き起こしたりする時には使えるけれども、普通は使わない。だからそのことが分かっていない。英語であれば古いという年齢の古いのと、歳をとっているのと、若いとヤングとオールドの対立があると同時に、新しいのと古いの対立もある。私達はそれを二つちゃんと区分けするっていうやり方を持っている。ということがもしこちらが分かっていればそこでニヤツとして悪戯をし、会話を楽しむということもやれるんですけど、分からなければそこでひっかかってしまう。「歳をとりました。」と言うべきです。「と言うべきです。」という一方的押しつけをやると、一回はいいです。それから親切な関係が出来ていてですね、「ちゃんと教えてあげますよ。」という関係が出来ていればこれはジャンジャン教えて上げるに越したことはありません。

外国人の留学生で日本語を勉強している人達のいろいろぼす中で、最も起きることの一つに、日本人は私の日本語を直してくれないという。分からなくても干渉しない。普段はいろんなことに干渉するのに、私の日本語の変なことに対しては助けてくれない、という不満があります。それは説明するのが間違ってるかも知れませんが、いやそれは遠慮しているということがある。もう一つは母国語の話者というのはいつでもそうだけど、実は説明出来ないんだと、だから直せないんだからということを使うんです。間違ってるかも知れませんがね。まあそういう時に適切な指導が出来る。指導しなくてもいいんですが、彼が言っていることが受け止められるっていうことが一番大切だろうと思うんです。文字どおりにこう言ったではないかというのは意味がない、「古くなりました。」というのはそういった問題も一つ含んでいる。もう一つこの文の中には問題点がある。その山田さんのおばあさんは古くなりましたをいう。うっかりすると他の部分は正しいかと思っちゃうんですが、実はこれは喧嘩を引き起こすような問題を含んでいて、本当は彼が言わなければならなかったのは「山田さんのおばあさんは歳をとりました。」と言いたかったんですね。ところがおばあさんという発音が出来ない。日本語では「おばさん」と「おばあさん」の区別は日本人なら誰でも出来る

思うんですね。それ程日本語の中では長さ「ば」というか「ばあ」というか、これは誰でも出来る基本的な決まりとして存在するんですが、英語の人でも中国語の人でも中国語の人でも非常に難しい問題です。北京でお話をして200人位中国人の日本語の先生がいらした時なんです、その時にこの問題を取上げまして会場の皆さんに聞いてみたんですね。ちょっと悪いことしたかなあと思ったんですけど、私が言うのは幾つ音が入っていますかっていうのを尋ねてみたんです。例えば例として二つ使ったんです。「オーオ、オー」こういう例を一つ使った。これは我々が数えて字で書いていくとしますと、「オーオ、オー」六つある訳ですね。幾つありますか。一つの人これはいなかった。二つの人、ここからもう始まるんです。三つの人これがもう圧倒的多数、五つが非常に少なくなる。六つは例外的にしか、日本で生活したそういう人しかいなかった。日本語を教えている先生方でもそうでした。それから「オー、オーオー」というのも使ってみたんですが、それだけ日本語でははっきりしている習慣、音の決まりなんですが、中国語ではそれが無い。英語でもそれが無い。「おばさん」と「おばあさん」と「おばあさん」と「おばあさん」の区別は至難の技です。何かこう話題にしてお話なさる時に、こういった組合せで「あのおじいさんとおじさんとおおじさん」とやりますと大抵参っちゃいます。でもそれが出来ないのが悪いということではないんですね。それは日本語を勉強するためにはそれを乗り越えてもらいたいとは思いますが、でも難しい問題点あることは確かです。ですからそこで「ヤマダサンノオバアサンガ……」とこうやった時にこれが「おばあさん」か「おばさん」かのどちらだということが想定出来る、そういう力をこちらが持っているところから楽しい話も始めることが出来る。でもそういう日本語についての日本語を客観的に見る力をこちらが持っていないと、文字どおりに「おばあさん」となり「山田さんのおばあさんって誰、死んだ人のこと。」とかそんな話になってしまう。

日本語について発音も文法も言葉の使い方も含めて私達が幅広く客観的に見られる力を持っていれば、外国人が日本語を話をする時にそれこそお互いに何か情報を交換し合ったり、気持ちを交わし合ったりということがより良く出来るということがあると思うんです。何と言っても日本人が持っている日本語について私達は習慣的に使っているいる為に、その実態を把握する習慣ありません。小学校を始め、中学、高校、大学を通してそれを客観的に見るという訓練を受けていないんですが、将来は是非国語の時間だけではなくて、英語の時間とかあるいは他の社会科なり、数学なり、各教科の中で日本語そのものを意識的に把握出来

るような、そういう指導カリキュラムというのが生まれてくると、実際に外国人と話をする為にも大変役に立つだろうと思います。

発音の話は今し始めましたので、こんな音に一体何故出てくるのかっていう例を二つ三つ上げてみますと、アメリカから来た学生が面接をして「何を勉強するんですか。いつ来たんですか。専攻は何ですか。」っていう話をする時、「エロ文学です。」とこう言ったりする。エロ文学をやるというのはこれは？と思うとこれもやっぱり発音上の問題があって、それをただ「エロ」と言ったから低級な人間だと思っただけではないので、本当は本人は「江戸文学がやりたい。」、江戸文学の「ど」の音、良く言われますアメリカ英語の場合には、水のこと「ウォーター」ですが、それがはじきおん化しまして「ワラ」という発音になる。あの「ラ」というのと同じやり方で「エロ文学」っていうのが出てくる訳ですが、それが想定出来れば、あるいはそういう手掛かりってのはこの地域ですと余りないのですが、大阪ですと「よろがわのうろん」っていうのがありますね。「うどん」が「うろん」になるっていう、そういうことなんか身近な言葉生活の中に結構あって、それが言葉を分析していく客観的に把握していくことの大きな力になるということがあるんですね。名古屋弁でもそうです。名古屋弁の中にある音でも「アァー」という音とか「さみいー」の「いー」とか「とぅえー」の「うえー」とかですね。ああいう類の音をつかめる力が、それが外国語に迫っていくための大きな財産になる。だから身近な所からその国際化の為の力作りは始まるんだと、基本的には私思ってるんですが……。

その「エロ文学」の他にこんなこともあります。やはりアメリカ人の学生で「昨日京都へ行ってきました。」って言うから「何処へ行ったんですか。」と聞くと、「オテアライヘイッテキマシタ。」京都へ行ってお手洗いへ行ったのかと。これもやはり基本的には「お寺へ」と言いたいのが、「テラ」のRの音というより実は文字意識なんです、それがあつた為「テアライ」とわたる音が入ってしまうんですね。だからこちらの耳には「お手洗い」としか聞こえないようなことが起こる。これもまあ笑ってこの問題は多分大丈夫だとは思いますが、「オテアライ」ということを聞きますと面白いので、「何回トイレへ行ったんだ。」とやってもいいんですが、その時に受ける傷っていうのが結構ある訳ですね。信頼関係が出来ていけばそういう冗談も許されるんですが、真面目な話をしている「そうですか、昨日は京都へいらしたんですか。」なんてやっていると、「オテアライヘイッテキマシタ。」とここで問題起こせばそれはやっぱり傷つくであろう。傷つくと

いうことも国際理解の為には非常に大切な経験になり得るであろうし、それを許し受入れていくことも大切なことです。そういった経験の積み重ねなしには本当の意味での理解っていうのは成り立たないとは思いますが、でもそういう傷は早く回復する方がいいし、あんまり深い傷は負わせない方がいい。日本人不信になってしまったり、アメリカ人憎らしやという状態になることは望ましいことではないと思うんですね。そんなつまらないことが結構「あの人は嫌いだ。」の始まりになることが多い訳です。

国によって随分違いますが、例えばエジプト辺りから来ている学生がですね、「夕べ何食べたんですか。」って質問すると、「猫を食べました。」とこう答える。これなんかどうでしょうねえ。「夕べ何食べたんですか。」「猫を食べました。」エジプトでは猫を食べるのかと。まあそういうレベルで話が進んでもいいんですが、もしここでその猫に対して、我々に猫と聞こえる音を発音する理由が、彼なり母音に我々の五つの母音アイウエオに当たるものが実はなくてですね、本人は「肉を食べた。」と言おうとしているのに、その「に」が「ね」になる、「く」が「こ」になる、という結果できた「猫を食べた。」なんである。ハワイのもともとの言葉もやっぱり三つしか母音がない訳ですね。日本語の中でも沖縄の言葉はもともと三つですから、母音が今の「猫を食べた。」と同じようなことが起こる訳ですね。そういうその発音の問題なんていうのは如何にも言語学的なっていうか、言葉の勉強の中でのうさぎことのように感じている方多いと思うんですが、その実際の側をやっている中で具体的に出てくる問題点で、それがディスコミュニケーションと言いますかコミュニケーションに邪魔になるようなことに関わってるんだということを私達が何処かの段階で経験してから、あの時猫じゃなくて肉だったんだということではなくって、予知出来る力として子供のうちから何処かで与えられていたら、もし自分自身のこと考えますと、外国人と接触してもう30何年になりますけれど、その中で繰り返して来た失敗の幾つかは防げたのではないかと。友達を失うことも防げたのではないかと。やってみて、喧嘩別れしてからはじめて後で分かるということが余りにも多かったと思っています。

余り発音のことにこだわっていますとつまらないですから、少しお話を言葉の使い方の方に移しかえます。例えば外国人の留学生が研究室へ入って来まして、入って来るなりいきなりですね、「先生、私レポート書きました。先生、読みたいですか。」とこういうことがよくあります。「私レポート書きました。先生、読みたいですか。」「読みたくないよ。忙しいんだから。」と言える関係が出来ていけばもう安心なんですが、ま

だ関係が出来ていない時にはこちらも躊躇します。不愉快になりますからその不愉快さが顔に出ます。で、その不愉快さに遭遇して彼がそこで日本語の使い方、日本人の礼儀の問題を学習するであろうというのは樂觀的で不親切な考え方だと思うんですね。やっぱり「先生読みたいですか。」と言った時に反省してもらう為の仮の言葉が例えば出せる。「読みたいですか。それでいいの。」とか何とかってそういう手続きがある。例えば話が終わった後で「こういう時は、読みたいですかじゃないんですよ。」というようなことが言える、そういう力を持っていると信頼感ってのは随分大きくなる。助けてくれる人と自分の失敗に対して批判し、逃げて行く人とは大きな差が生まれると思うんですね。「読みたいですか。」は適切ではない、正しくないと言いますとそうすると学生はそこで何をやるかと言いますと、「お読みになりたいでございませうか。」とか何とか一生懸命敬語のルールを使って、より高い言い方だとされている表現に変えようとします。それでも問題は解決しない訳ですね。「先生、レポート書きました。先生、私のこのレポートお読みになりとうございませうか。」と言われたってこれは解決にはならない。一般的に我々がそこでとる方法は、「読んで頂けますでしょうか。」とか、そういう自分の立場に立って許しを得るような、そういう形になると思うんです。学生がですね、「読みたいですか。」という言い方を選ぶのは、ある意味では当然なことであって、例えば我々も使ってる訳ですね。相手次第で、非常に親しい相手だったら、「おお、俺ちょっとしたもの書いたよ、読みたいか。」なんて、友達同志だったら使える訳で、だから実際使っている。そうするとその読みたいという形を人間関係あるいは場面の関係の中で使い分けられているということ、そのことが分かってなければ、中国人の学生でも、アメリカ人の学生でも「読みたいですか。」ってというのが何故悪いという気持ちになるのは当たり前だと思うんです。

電話かけてきて、「奥さんが欲しいです。」と言った学生が昔いましたけれど、これは余りにも直訳的で「ウオント」という言葉の「欲しい」とか、「たい」とかいうのはニュートラルにいいですか、上下関係とかそういうものに関係なく使うことが出来る。そういう使い方と上下関係で左右される日本語の使い方に差がある。だからある意味では素直な気持ちで言っているものを我々が自分達の習慣の中で受け止めて腹を立てましたから、普通そうだと思うんですね。「読みたいですか。」って言われた時に、「読まして頂きます。」とは教師の立場としては言いにくい。こういうことってのは多分最近少しずつ増えてきていますから、帰国子女の人達を受け入れていらっしゃる先生方

は、もうある意味では毎日のように、もしかしたら経験していらっしゃるのではないかと思うんですね。そういう時にも是非ですね、ただ寛容になるということだけではなくてですね、我慢するという事だけでは駄目で、問題を解決していく為の技術、それを持った上で寛容になって頂くということが学生との関係を作っていく為には物凄く大切ではないかと思うんです。人間関係に言葉の使い方が支配されるという点が一番大きな問題点の一つですね。目下には使えるけれど目上には使えないということが、ただ「読みますか。」とか、「お読みになりますか。」と、あるいは「来るか。」というのと「いらっしゃいますか。」という、所謂敬語として表面に出て来ているものだけで使い分けられているだけではない訳ですね。日本語の大架梁に言えば、すべての面にわたって私達は人間関係などを頭に入れて使い分けてる。外国人の学生が驚くことの一つに相手によって使えない言葉、その中に相手を褒めることさえあるということがあります。先生を悪く言うとか、目上の人を批判するというのは何処の国でも良くないことだという考え方がある訳ですね。ところが遠慮しなけりゃならないことだということはある訳です。ところが褒めることについてさえ日本人はしないんだということはかなりショックなようです。授業が終わりますでしょ、終わった途端に学生がですね、「有り難うございました。先生の今日の授業は大変良かったです。上手に話しました。」片言の学生に「上手に話しました。」なんて言われてたまるか。「先週先生の論文をジャパン・タイムスで読みました。良く出来ていました。」学生に「良く出来ていました。」とこれは自分の素直な感覚、これは大事にしたいと思うんですよ。自分自身のその日本語の話し手としての平均的な普通の感覚がなくなってですね、「先生の論文読みました。良く出来ていました。」そこでちょっと何も感じないようになったら、私は日本語の専門家としては困ると思うので、これはむしろ大事にしておきたい。その感覚的にですね、不愉快に感じるということは決してなくさないで、もう一方で冷静にそれを見つめるという力を持ちたいというのが自分の主義なんです。が、「先生、授業上手にやりました。」と言われることについて、これ、やっぱり指摘をしなければならぬ。それでそういう時には、褒めないんだ、誉めないというだけでは納得しない。一般化した答えを大人の場合だったら要求する訳ですね。どういう時に駄目なのか、誉められないのか、そんな馬鹿な話はない、「だって、先生、尊敬してるし、好きだし、だから誉める、良くやったんだから何故悪い。」目上の人に対して評価を加えないという一つの傾向がある訳ですね。だから上手にやったとしてもそのことを直接評価する言い

方では自分の気持ちは表さない。自分の立場に立って「大変勉強になりました。」というような言い方をするんだとまあこう与えて行く訳です。その辺がそれも限り無く難しい問題が残されている訳ですが、教室の中のような公の場で「先生、上手でした。」と言われると困るし、おもしろくないのですけれど、その後コーヒー飲みに行くとか、あるいはそこでちょっとアルコールが入ったりしたところで、「先生、上手でしたね。」とこう言われた時は何の抵抗もない。一体これは何なのか。我々が普段やっているやり方、それを反省する力を持っていないと学生はお酒を飲む場で使っている日本人のやり方、日本人の学生が先生に「先生、文書くの上手ですね。」とは「話すの上手いですね。」とかやっているんだから自分もやっていだろうと教室でこうやると先生が怒るということにぶつかるというのは困る訳ですね。

相手のことを評価しない。評価することに極めて敏感であって、第一レベルの原則としては目上の人に対しては公の場では褒めることさえしない。場面が変わると可能になって来るというようなことを我々が心得ていて話を作る、そうしますと日本文化論、あるいは彼らの国の文化、習慣、人間観というものに話は発展していく可能性がある訳ですね。相手のことを意識するってのは、日本語の極めて重要な要素だと思うんです。これだけを考えていても日本語を客観的に見ていく、彼らが話す話し方に何かを発見していくという手掛かりになると思うんです。文字どおりに文章で書かれたような文を学習者が実際に話します。町の中でもあるいは学校の中でも所謂片言の日本語というんでしょうか、学習した日本語で話してくる子供なり大人ってというのは増えてきていると思うんです。そういう機会にそこから出てくる情報の中で話した話し方の中で、日本語はどのようなか、彼らの母国語はどのようなかというようなことを考えていく豊富な材料というのが出てくると思うんです。よくこれも学生の書くものの中に出てくるのですが、あるいは話の中に出てくるのですが、相手に何かを要求する時の言い方で、「コーヒー入れました。コーヒー飲みたいですか。」とか「たいですか」でなくても「飲んで下さい。」というのでもよく出てきます。「お茶入れました。どうぞお茶を飲んで下さい。」とこれは完璧な文です。文法的にもまったく間違いがないです。でも「どうぞお茶を飲んで下さい」というのは日本人は普段には使わない。「どうぞお茶を飲んで下さい。」というのと、何か集団で、何かこういうような会合があってですね、休憩時間になって、「隣の部屋にお茶が用意してありますからどうぞそこで御自由に飲んで下さい。」こういう形で相手が個別ではなく集団として、パーソナルでな

いという状態では「飲んで下さい」は成り立つけれども面と向かって「飲んで下さい」はないんじゃないでしょうか。我々が普段やっているのは「どうぞ」だけで済ます場合、特にお茶が目の前にあればですね、入れるのが相手に分かれば「如何ですか」あるいは「どうぞ」とこれだけで済ましてしまう。場面で分かることは省略する、というような傾向が日本語の話し方では結構多いと思うんです。これも大問題です。その目の前に見えるお茶入れてる時にですね、「どうぞお茶を」なんていちいちお茶言わない。あるいは相手と自分の関係がはっきりして話し合いをしている時に、いちいち「あなたは、あなたは」とか「私は、私は」っていうのは使わない訳ですね。「私は水谷でございます。」と僕がここへ出て来てやるとこれは一種のバタ臭さを感じさせるはずだと思います。「水谷でございます」から出発すればいいのであって、ここで「私は」を入れるのは説明的すぎるというのが今の一般的な感覚だろうと思うんです。だから、「どうぞお茶を飲んで下さい。」の「飲んで下さい」までであることは余分な表現をそこで使うことになります。そうすると押しつけがましい。一番最初に言いましたように、いちいち「飲んで下さい」、「したいですか」そういう言い方で終わりがくくられますと、「あれは自己主張が強い、相手に押しつける。」ということを知らず知らずのうちに、「あの人間は押しつけがましい奴だ。」というふうに誤解するということが起こると思うんです。そこが一番こわいことであって、相手に対する働きかけ、それに対して我々が普段配慮して「て下さい」という形を使わないでやっているところに使われたことが、ある話し手のイメージ作りに関係してくるんだということがあると思うんです。今、「あなた」という言葉ちょっと出してしまいましたけれど、「あなた」というような言葉でも何処でどのように我々が使っているかということの観察の大きな手掛かりになると思います。

紙で書いたレベルで、あるいはお遊びで日本語の勉強をするとか外国人と言葉について話すというところでは、「あなた」は「ユー」に当たるというのは結構だと思います。でも実際に「ユー」という英語の「ユー」という言葉を使う時に、すべて「あなた」を入れたらこれは間違いなく喧嘩をすることになるだろうと思います。世代によって随分違うんですが、ある世代以上の人、今恐らく70数才位から上だと思っておりますが、その方達にとって「あなた」という言葉は実は結構丁寧な言い方です。ですから「あなたは」とそういう方がおっしゃる時には決して相手を低めてはいらっしゃらない、ところがその年齢層により下に来ますと「あなた」という言葉は目上に対しては使わない。目下に対

してしか使わなくなってきました。ですから目下という言い方だけでは本当はいけないんですが、一種の「あなたと私」という敵対という程ではないんですが、対立関係をはっきりさせるという時に使われるようになってきますから、娘さんがお母さんに「あなたは」という言葉を使う時は、これは大人になった証拠かも知れませんが、親が悲しむ最初の経験になるだろう。学生が、最近はなくなりましたが、学生運動が盛んな頃教室や廊下で大学生が先生に会う時には「先生」といつも言っていた。で、学校との紛争の最中に先生と対決を迫られるような場合になると「あなたは」というのが出てくる。こういう使い方「あなた」が使われている。新入社員が会社に入って、先輩に対して「あなたは」と言うとその後暫くいびられることは間違いない。学校の中でも結構あるんじゃないでしょうか。そういう使い方を観察する手掛かりになる言葉ってのは一杯ある訳です。だから何かを持っていて、もし身の回りに外国人の日本語を使う人がいたら、あるいはテレビなんかに出てくる外国人でも結構です。結構我々が使っているものと違う使い方をしていきますので、それを手掛かりにして観察して下さいと役に立つと思うんですが、研究室へ入って来る時にズバリと「論文読みたいですか。」っていうのはさっき申し上げました。もっとも入ってくる時にも入り方が随分違いがありましてですね、ドアが閉まって言葉だけではなくてその時ノックをして入って来る。ノックの仕方が国によって違う、そういう楽しみもあります。日本人か外国人かっていうのは、少なくとも外国人でも日本人と同じやるのはいますので、逆は成り立たないんですが、「トントン、トントン」とこのペースでくるのはまあ日本人でも、「トトトントン」これくるのは日本人ではない。あるいは「トトトン」、こういうのもありますね。それですぐ分かってしまうということを入れて来て途端に言いますと、結構ショックを与えるものです。四拍子でしょうか、「トントン、トントン」というやり方から我々は離れられないんじゃないでしょうか。時々粹な方がいらして「トントントン」とやったりなさるし、私も家へ帰る時、ちょっと普通でないブザーの押し方をしますが、これは押し売りよけの為にやってる訳で、普通のやり方ではない。「トントントン」アメリカ人なんかは三つか五つの方が却って多い位ですね。凄くおもしろかったのはブラジルの人の半分がサンバでやる。「トトトントン、トトトン」、こういうのがある、あれだけでも調べていたら面白いんじゃないかなと思うんです。

とにかくノックをして入って来ます。その後さっきまで触れていたのは誤りということで触れていた、誤用ですね。使わないという側面、これも結構観察すべ

き、あるいは摩擦を起こしてくる問題点として見る必要があると思うんです。例えば私達ちょっと日本語とこう考えますとですね、真面目に考え過ぎる為に立派な言葉、非常に重い言葉、高級な単語というような方に考えは行ってしまいます。しかし私達が普段の生活の中でコミュニケーションしている時に、いろんな役割を言葉は果たしています。その中には事実を伝達するという役割もあれば、気持を通わせるという役割もあります。だから気持が通じることの為に使っている沢山の言葉があるんですが、その中の非常に卑俗なもので話をし始める。最初に入れていく、屑だと思いきや、そういう言葉が一杯ある訳です。「えー」とか、「あー」とか、「そのー」とか、「あー」とか何かある訳ですね。こういう類の言葉も相手に何を伝えているかということをおお切にすべきだと考えるんです。外国人の学生の日本語を聞いてますと余り使わないんです。一つには例えば英語なんかの場合には、そういうさしはさむ言葉を使うのは頭が悪い証拠だという考えがありましてですね、屑のような言葉を使うのは駄目だと、日本でも一時期そういう時期がありました。「ネ」とか「サ」とか「ヨ」とか今もあるかなあ、「ネサヨ運動」ってのがありまして、それは悪い言葉だから使うなってんで罰を与えたりした時代があったんですが、「ネ」とか「サ」とか「ヨ」、ある意味では問題もありますけれど、ある目的の為に、でも普通の会話の中で「ネ」を入れないで話が出来るとかということを考えれば、大きな機能を持つてるってのは、はっきりすると思うんです。

話を戻しまして、話をしだす時に使う「あー」とか「えー」とかいうのを使わないでいる。だから日本人がどんなにそれを上手に使ってるか分かるかっていう説明をする訳ですが、どうでしょうね、「あー」とか「えー」とか「えー」とかというのは使い方がどう違うか。同じだとはお考えにならない筈です。どっか感じるところでは違うってのがあつた筈です。それをきちんと説明出来るかどうか。この間、国語学会の大会がありまして、それで講演して「あー」と「えー」とのお話をちょっとしたんです。殆どの人が考えたことがなかった。国語学の研究自体もそういう領域には注目していない。やっぱり立派な言葉を勉強するという歴史を持っているもんですから、生きてる人間が如何に大切であっても、低俗であるから研究の対象にはならないということなのかも知れませんが、本当の意味で一人一人の人間を公正に大事にして行こうというのなら、その人の持っている欠点も、身体上の欠点も含めてですね、大事にすべきであろうとすれば、それを支えている話し言葉の中に表れているすべてのものに対して、人間に興味を持つものならば深い関心を持たな

ければいけないのではないか。「あの一」であっても「えーと」であっても一体それはその人間がその瞬間において何を伝えようとしているのか、訴えようとしているのかということを考えるべきだと思うんですね。「えーと」っていうのは自分がこれから言おうという言葉が見つからない時、それを示す記号だと思うんです。だから相手に向かって「えーと」っていうのは、やらない訳です。時計を見ながら思い出す、「えーと今何時だったかな。」とこういう使い方をする訳ですね。だから確かにこの言葉の方は使い過ぎると頭の悪さを露呈することになる。癖になってる人がありますからこれは気を付けた方がいい。人間ってのは癖を持ちますんでね。つい調子にのって「えーと、えーと」ってやるがありますが、これは損をします。しかし「あの一」の方は恐ろしく有効な機能を持っていて、さっきの研究室のドアを開けて入って来て、最初に「お邪魔します。」、「お邪魔してもいいですか。」、「ああ、いいよ。」、その次に「あの一」で始まるのが極めて

多いんですが、その時の「あの、ちょっとお願いしたいことがあるんですが。」こうくる時の「あの、ちょっと」の「あの」とですね、「あの一、ちょっと一、お願い一」とくる時の「あの」はその次にくるもの大きさをはっきり指し示しています。「あの一」とくと、「あっ、これは30分以上時間をとられるな。」、あるいはお金をかなり貸してくれとくるかなあと、「あの、ちょっと」とこうくる時は「ああ、いいよ」とこう軽く答えられる。そういうその機能を「あの」が持っている。そういう普段使っている本当につまらないと思われそうな言葉の中に我々が持っている財産っていうんでしょうか考え方の基本になるものがあるんだと、そして外国人がその我々の持っている日本語を使って、日本語を使っている時にもそれは英語なり中国語なりに支えられながら使っているので、その意図を思いやって理解をスムーズに運ぶ為の、発見の為の素材、題材が日本語をより客観的に我々がつかむことによって可能になるんだとこう私は思います。